

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 武田 龍樹	留学機関名 プノンペン王立大学
留学先国名 カンボジア王国	留学期間 西暦 2010年7月～2011年6月
研究テーマ トラウマと仏教—現代カンボジアにおける仏教実践に関する人類学的研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>(研究の概要と目的)</p> <p>100万人とも200万人とも言われる死者を出したポルポト政権の圧政下では、僧侶の強制還俗や宗教活動の禁止などによって、カンボジアの仏教は一時的に消滅した。それ以後、人民革命党政権はその統治に正統性を与えポルポト政権からの解放を象徴づけるため仏教を制限しながらも動員してきた。一方で、ポルポト時代以後の仏教の復興は俗人篤信家たちの自発的な役割によるところが大きく、いわば「下からの復興」であった。</p> <p>申請者は、ポルポト時代以後のカンボジア村落部において、俗人篤信家が仏教実践を通じてどのような集団を形成してきたのかということ、フィールドワークを通じてこれまで研究してきた。篤信家は現在60歳以上の高齢者であり、上座仏教徒社会についての先行研究で指摘されてきたように、死に近づきつつあることや経済活動からの隠遁が関係している。ただそれだけでなく、ポルポト時代直後のカリスマ的な僧侶の出現によって彼らの仏教実践は活発化したのであり、そこにトラウマ的体験や記憶からの解放や癒しを人々が求めた点を指摘できる。</p> <p>本研究は、この点をさらに深め、トラウマ的記憶と仏教実践が相互にどのような影響を及ぼしているのかを記述・分析することを目的とする。</p> <p>そのために、まず個々人のライフヒストリーの詳細な聞き取りを行い、そこからポルポト時代やそれ以前と以後、現在、未来といった時間認識を探る。次に、こうした時間認識の中で現在の仏教実践がどのように組み立てられ、どのような意味をもつのかを浮かび上がらせる。そして再度、個々人のライフヒストリーに立ち返り、仏教的観念や実践がどのように記憶を編成しているのか、そこではポルポト時代をどのように語るのか、あるいは語りえないのかを検討する。</p>	
<p>(研究の意義)</p> <p>宗教による癒しについてこれまで多くの人類学的研究が蓄積されてきた。しかしながら、ライフサイクルの中での生や死、病などから生じる苦しみに対する癒しについての研究が主であり、政治的暴力やジェノサイドによる苦しみに対する宗教の関わりについての長期のフィールドワークにもとづいた人類学的研究は乏しい。また一方で、近年盛んに論じられている記憶といった問題についても、宗教はイデオロギーやアイデンティティ・ポリティクスとして政治的に動員される側面が研究されてきたが、当事者を癒しや和解に向かわせるような宗教のもつポジティブな可能性について提示されることはあまりなかった。</p> <p>こうした背景から、ポルポト時代を体験した人々のトラウマ的記憶と仏教実践との相互関係に注目する本研究は、カンボジア研究に貢献するだけでなく、政治的暴力やそのトラウマに対する宗教のポジティブな可能性について探究するものであり、重要な研究課題である。</p>	

# 成果報告書

記入日 2012 年 4 月 23 日

氏名 武田龍樹	留学先国名 カンボジア	所属機関 プノンペン王立大学
研究テーマ：トラウマと仏教—現代カンボジアにおける仏教実践に関する人類学的研究		
留学期間：2010年7月～2012年3月		
<p>0. はじめに</p> <p>本研究の目的は、現代カンボジアにおいて、ポル・ポト時代のトラウマ的記憶と仏教実践が相互にどのような影響を及ぼし合っているのかを記述・分析することであり、約20ヶ月のカンボジア留学と調査をおこなった。</p> <p>調査結果はいまだ十分な分析をおこなえていない状態にあるが、ここでは得られた成果や知見を簡単に報告したい。まず、調査の日程や方法など調査の概要について説明する。次に、調査地の住民の現在の状況や過去の歴史的状況を挙げて、調査地の概要を示し、ポル・ポト時代の語りと現在の仏教的実践・日常実践との関係に若干の検討を加える。そして最後に今後の課題と展望を述べたい。</p> <p>1. 調査の概要</p> <p>当初はカンボジア東部コンポンチャム州での調査を予定していたが、カンボジアに滞在するうちに、近年まで政府軍とクメール・ルージュとの戦闘が長く続き内戦の影響を色濃く受けているとされるカンボジア西部バタンバン州の人々に関心が沸き、調査地をバタンバン州へと変更した。また、調査期間を1年と予定していたが、調査地の変更に伴い、松下幸之助記念財団の研究助成の受領期限が過ぎた後も2012年3月まで私費で調査を続行した。</p> <p>まず、2011年3月から4月までの約2ヵ月間、バタンバン州の概況を把握し具体的な調査地を決定するため、バタンバン州の各郡の郡役場や区役場、村落部の寺院を訪問し、簡単な聞き取りをおこなった。その後、調査地をバタンバン州ボヴァル郡クドルタハエン区に決定し、2011年5月からクドルタハエン区KT村に位置するK寺に滞在しながらフィールド調査を開始した。7月にビザの延長と日本の所属大学での事務手続きのために一時帰国した期間を除き、5月から8月まで、K寺の寺院委員会の構成や村落内で展開される仏教儀礼を把握しようとした。2011年9月から11月にかけて、住民の出身地や生業などを把握するために、K寺近郊の二つの村(KT村とPI村)で世帯調査を実施した。2011年12月から2012年3月までは、主に1970年代の内戦やポル・ポト時代に関する語りを収集するため、聞き取り調査をおこなった。聞き取りをおこなう際には、語る人の許可を得られた場合に限り、ICレコーダーを使用し録音した。</p>		



【図】 カンボジアにおけるバタンバン州と調査地の位置

## 2. 調査地の概要

### (1) 現在の状況

現在、K 寺の周囲には九つの村があり、この九つの村が一つのまとまりをもった地域「クドル」として人々には認識されている。各村長への聞き取りから、クドル内の 2010 年時の人口と家族数をまとめたものが次の表である。

クドル内の各村の人口と家族数

村落名	KT	PI	SS	SA	BU	KA	TH	TK	KL
人口	755	359	1177	683	967	560	300	665	612
家族数	165	80	274	183	211	86	87	230	105

モンコルボレイ川とそれにほぼ平行して走る国道 160 号線に沿って、各村の住居が立ち並ぶ。生業は稲作が中心であり、5 月から 6 月にかけて種を蒔き、12 月から 1 月にかけて稲の刈り取りを行う。灌漑設備の不足から、稲の収穫は 1 年に 1 度のみで、二期作は行われていない。ポル・ポト時代以後も、1979 年から 1997 年まで激しい戦場となり、居住地近くの耕作地でしか農業ができなかったことや、たびたび他の地域へと避難しなければならなかったことから、他の地域に比べて開発が遅れており、多くの村人は裕福ではない。村人の大部分が農業を営んでいるが、区役場や警察署、小学校、中学校などの公共機関で働く人や、10km ほど北上したところにあるボヴァル郡の商いの中心となる市場で働く人も少数だが存在する。

現在の住民は、その出生地から便宜的に類別すると、クドルを出生地とする者、1950 年代から 1960 年代に肥沃な耕作地を求めてカンボジア南西部から移住してきた者、そしてタイ国境地域出身者から構成される。タイ国境地域出身者は、ポル・ポト時代にこの地域に強制移住させられたが、1979 年以降もタイ国境地域がクメール・ルージュ支配下となったことから、出生地への帰還が叶わず、1979 年から 1980 年代前半にかけてクドルに定住するようになった人々である。

### (2) 村落で展開される仏教と K 寺の寺院委員会

K 寺の寺院委員会は、主に寺院建造物の修理や建設、寺院の資金のやりくりに関わっており、男性 10 人、女性 3 人から構成されている。仏日には、K 寺の周囲九つの村から、60 歳以上の男性 40 人、女性 50 人ほどが寺院に集まり、午前中いっぱい寺で過ごす。また、各村にそれぞれ 3 人ずつアチャーと呼ばれる儀礼執行者がおり、村の様々な儀礼において中心的役割を果たす。

ポル・ポト時代、当時の土建事業の資材獲得のために、木製の僧房や布薩堂など K 寺の建造物は講堂を除いて全て破壊された。寺院建造物の本格的な再建や修理が始まったのは 2000 年代に入ってからであり、2002 年に新たな講堂を建設し、2006 年に布薩堂を再建、2010 年にはコンクリート製の僧房を建設した。こうした寺院建造物の再建には、村人の協力や布施のみならず、都市部で成功した裕福なクドル出身者や、難民キャンプからアメリカやフランスへと亡命した親族からの経済的な支援が不可欠だった。

### (3) 内戦から現在までの歴史的状況

1970 年にロン・ノル将軍がシハヌークを失脚させクーデターを起こすと、アメリカに支援されたロン・ノル政府と、シハヌークと手を結んだクメール・ルージュとの間で内戦が始まった。同年、調査地クドルでは、クメール・ルージュとの戦闘に備えロン・ノル軍の駐屯地が KT 村に建設され、多くの成人男性がロン・ノル軍兵士となる。この時期、この地域に留まる人がいる一方で、安全な都市部へと避難した人がいる。また、クメール・ルージュ占領地域である森林の中へと避難した村人も存在する。1974 年、近隣の地域で、クメール・ルージュとロン・ノル軍との間で大規模な戦闘が起こる。この戦闘はクメール・ルージュ側が勝利し KT 村のロン・ノル軍駐屯地が陥落すると、それまで村内に留まっていた人々の多くは他の地域へと逃走する。

1975 年、クメール・ルージュがプノンペンを陥落させポル・ポト政権が成立すると、国内の戦闘は終結し、クメール・ルージュ側に避難し森林に入っていた人々やロン・ノル政権側の都市部へと避難していた人々は 1976 年までに自発的もしくは強制的にクドルへと帰還する。また、1975 年末までに、タイ国境地域の人々がクドルへと強制的に移住させられる。また、同年、ロン・ノル政権で要職に就いていた役人や兵士の処刑が頻繁におこなわれる。1978 年には、バタンバン州を含めたカンボジア北西部のクメール・ルージュ幹部がポル・ポト政権を裏切ったとされ、北西部クメール・ルージュ幹部の粛清と南西部からの人々の移住が起こる。

1979 年にカンボジア救国民族統一戦線とヴェトナム軍に駆逐されたクメール・ルージュはタイ国境に逃れ、そのカンボジア全土での支配は瓦解した。この頃、ボヴァル郡ではクメール・ルージュ幹部やそれに加担した人物への報復・殺害がなされたという。これ以降、逃走したクメール・ルージュはタイ国境地域を支配下に置く。タイ国境地域には、ヴェトナムの支援の下で救国民族統一戦線が樹立したカンボジア人民共和国政府に敵対するシハヌーク派やソン・サン派の軍事拠点もあった。クメール・ルージュが消滅する 1997 年頃まで、クドルには、ヴェトナム軍（1989 年までにカンボジアから撤退）とカンボジア政府軍の駐屯地が置かれ、反政府勢力との間で激しい戦闘がたびたび起こった。

## 3. ポル・ポト時代の語りと現在の日常的実践

### (1) ポル・ポト時代における人々の経験の相違

ポル・ポト時代において、内戦期にクメール・ルージュ支配下の森林へと移動した人々は「旧人民」、

(成果報告書)

村内に留まった人々や都市部へと避難した人々は「新人民」と呼ばれた。1975年からバットンバン州のクメール・ルージュ幹部に対する粛清が起こった1978年初頭頃まで、村落部の行政機構や保安機構における要職を担ったのは「旧人民」である。また、当時の行政区画として、モンコルボレイ川の西岸部は「第60郡」、東岸部は「第70郡」とされた。人々の語りによれば、「第70郡」では飢餓がそれほど起こらなかったのに対して、「第60郡」では飢餓がたびたび起こり多数の死者が出た。また、1975年に、この地域に強制移住させられたタイ国境地域の人々は、畑作や宝石採掘を生業としており稲作を経験したことがなかったため、稲作地域での重労働や不慣れな生活によって多数の死者を出したとされている。このように、現在この地区に居住する人々のポル・ポト時代における経験は一様ではなかった。また、人々は、度重なる移住によってポル・ポト時代にどのような生活を送っていたのかを互いに知らない場合があり、「旧人民」であったか「新人民」であったか、居住場所は「第60郡」だったのか「第70郡」だったのか、またこの地区の出身者かタイ国境地域出身者か、ということを目指して、ポル・ポト時代における互いの状況を推察しようとする。

## (2) 加害者／被害者

「新人民」だった人やタイ国境地域出身者の語りの中には、ポル・ポト時代における「旧人民」からの罵倒や飢餓、処刑といった恐怖と苦難が現れる。時に「旧人民」に対する強い怒りや憎しみを口にする人や、処刑への関与や飢餓の一因となったと噂される特定の人物を名指しで非難する人もいた。ここからは、「旧人民」／「新人民」という対比が加害者／被害者というイメージと重なりあうように見える。人々がしばしば口にする「カンボジア人が殺し合った」という語りが、「旧人民」やクメール・ルージュが「新人民」に対して悪行を働いた、というように私には聞こえる。しかしその一方で、タイ国境地域出身の一人の男性は、特定の人物を挙げ、「旧人民は文字も読めず仏法も知らないくらい愚かであり、確かに悪行を働いた」と語りながら、モンコルボレイ川西岸での大量死について、クメール・ルージュ幹部がそれに加担しその一因となったとするだけでなく、「新人民」同士の間でも自らが生き延びるために当時の役人への密告が存在していたと語った。この語りの中では加害者／被害者の境界が不明瞭となり、当時への想起によって語った本人自らがそのグレイゾーンに放り出されるような瞬間が見出される。

## (3) 過去を抑え込む

村の一人の長老は、ポル・ポト時代に悪行を働いたとされる人物が現在もこの地域に居住していることを承知していながらも、「ポル・ポト時代に悪行を働いた者は皆死んだか、南西部のクメール・ルージュ幹部とともにタイ国境地域へ逃走した」と敢えて語る。また、ポル・ポト時代に悪行を働いたとされる人物も仏日に戒を請うためにK寺に参詣しており、実際にポル・ポト時代にその悪行を直に目撃したという人は「一緒にしゃべりたくない」と語るが、悪行を働いた人物を寺院から排除しようとする動きは調査時には見られなかった。人々のこうした語りによる実践や寺院に共に集う実践は、時折噴出するポル・ポト時代に対する怒りや憎しみ、あるいは語りと想起の中で加害者／被害者の境界が曖昧になることへの戸惑いを抑え込もうとする側面があるように私には思われた。

#### 4. 今後の課題

今後は、今回の調査で得られたデータの整理、特に収集したポル・ポト時代についての語りの分析を進め考察を深めていきたい。本報告では、トラウマ的記憶の沈黙に関して、敢えて語らないというような自発的・意識的な沈黙の側面を取り上げたが、沈黙の別の側面、言語による表現不可能性といったものについての検討を欠いている。また、現地調査それ自体の反省として、「新人民」だった人々への聞き取りに比べて、「旧人民」だった人々への聞き取りは過去のクメール・ルージュ支配への加担という点から困難だった場合もあり、収集できた語りは少なかった。博士論文の執筆につなげるためにも、今後もカンボジアでの調査を継続していきたい。

#### 留学を終えて

地方村落における仏教の研究のためにも、また様々な人々と知り合い少しでも受け入れてもらいやすくなるのではないかという考えから、調査地では仏教寺院に滞在していました。この寺院に頻繁に訪れる村の長老たちと次第に親しくなり毎日のように与太話や世間話を交わすような関係を築くことができたのではないかと、思っています。ICレコーダーを用いた聞き取り調査だけでなく、そうした与太話や世間話の中に、わたしの研究にとって大変重要な示唆を含んでいる言葉や人々の仕草、表情があったように感じています。また、時に、十分な食事を摂ることができず体調を崩したり、土埃や砂埃に悩まされたり、人々との関係に苛立ったりすることもありましたが、村の人々に心配され励まされたり、簡単な食事を振舞われたりするなど、とても親切に調査者であるわたしに接していただきました。これから、収集した人々の語りを詳細に分析していくこととなりますが、その際には村の人々の表情や仕草をいつも思い起こしていきたいと思えます。

研究生としての受け入れ先であるプノンペン王立大学では、社会学科講師のダオ・ブティ先生に大変お世話になりました。大学での研究生受け入れや宗教省での調査許可取得から、文献資料の入手方法、わたし自身の研究に対しても、本当に様々な助言をいただきました。また、シハヌーク仏教大学の事務に勤務するウナロム寺の僧侶ヨンセン・ジエット師にも様々な助言をいただきました。カンボジアに留学した約20ヶ月のうち、その大半を地方村落部での調査に費やしていましたが、2、3ヶ月に一度、首都プノンペンに戻った際には、ダオ・ブティ先生もヨンセン・ジエット師も、わたしの突然の訪問に気さくに応じていただきました。バタンバン州宗教局職員のコ・ソル氏には、州内での広域の聞き取り調査をおこなった際にバイク・タクシーのドライバーを引き受けてもらい、調査地に入った後も何かとわたしの安否を気遣っていただきました。感謝しています。

最後に、カンボジアへの留学・調査研究の機会を与えてくださった松下幸之助記念財団の皆さまに感謝申し上げます。今回、十分な費用をいただけたおかげで、金銭面の心配をすることなく留学・調査研究に専念することができました。本当にありがとうございました。

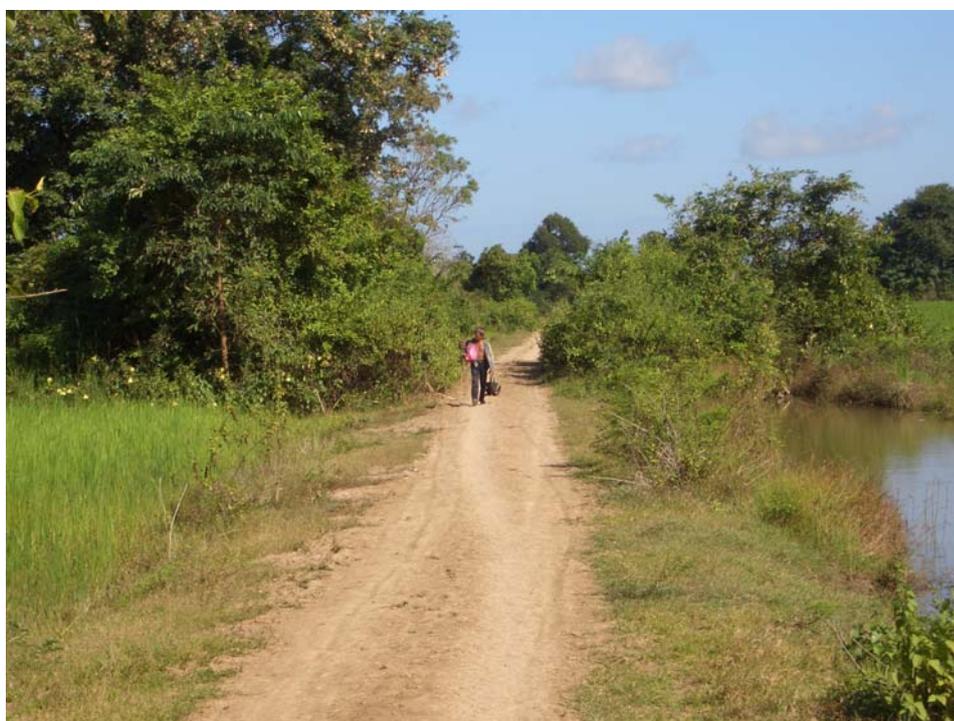
留学中の写真



【写真 1】 お世話になった村の長老とその息子と。



【写真 2】 K 寺の仏教儀礼に集う人々



【写真 3】 村から水田へとつづく道。